

礼拝「イエスだと分かった」

○ (ルカ24:25-31, マタイ26:26, 招き: ヨハネ14:19) 藤代 信牧師
序 大切なこと エマオ途上でのキリストとの出会いは、復活の物語の中でも、最も愛されているものの一つです。(私の祖父も、生涯の最後にエマオのキリストと出会いました。)この物語は私たちに何を教えてくれているのでしょうか？

人生は、旅路にたとえられます。一度きりの人生を、何を求め、どこに向かっていくかは大切です。偏った考え方や間違った考え方をしていると、神様から遠く離れて行くばかりです。弟子たちは、イエス様が復活されたエルサレムから反対方向に向かって行きました。彼らは何を信じ、何を信じていなかったのでしょうか。イエス様は、この2人を導くために、何をされたのでしょうか。

1. エマオへの道 「ちょうどこの日」、イエス様が復活されたまさにその日、2人の弟子たちがエルサレムを出て、エマオという村に向かって歩いていました。11kmほどの道程。3時間ほどかかるでしょう。長い道々、2人は互いに起った出来事すべてについて語り合っていました。「マグダラのマリアは、墓は空だった、み使いが現れた、イエス様が復活したと告げた。」「死んだ人間が復活するか？ 幻想だろう？」話し合い論じ合っていると、誰かが後から近づき、2人と一緒に歩き始めました。それがイエス様だとは全くわかりません。彼らには復活への信仰も期待もないので、分かりようもありません。

私たちがイエス様の真のお姿を知ることができるのは、議論によってでも常識によってでもありません。イエス様の方から、自分が誰であることを示してくださいなければ、人間の側からはわからないのです。

その旅人は言いました。「歩きながら語り合っているその話は何のことですか。」「2人は暗い顔で立ち止まると、クレオパが答えました。「エルサレムに滞在していて、そこで起ったことを、あなただけがご存じないのですか。」「イエス様は、彼らが何を話し、議論していたか、すべて知っていらっしゃいましたが、「どんなことですか」と彼らの心に寄り添い、問題は何かを引き出されます。

2人は答えます。「ナザレのイエス様のことですよ。」「神と民の間で、偉大な力を現された預言者でした。」「彼らのイエス様に対する認識は、「ナザレ出身の人」「預言者」でした。「ところが、私たちの祭司長たちや議員たちが、死刑にしようとしてピラトに引き渡して、十字架につけてしまいました。」「イスラエルを解放してくださる方と期待していたのに。」「彼らの関心は、メシアによるイスラエルの地上的・政治的な解放と、自分の出世、ということでした。「あの衝撃的な出来事から、3日目になりますが、仲間の女の人たちがお墓から帰ってきて、お体はなかった、み使いが『イエス様は生きておられる』と言った、というのです。」「男の仲間が行ってみると、確かにお体は見当たりませんでした。』

2人には、死人の復活などありえないことでした。今も人々は、イエスは立派な人、預言者、キリスト教を開いた偉人と、常識的・表面的に考えています。

2. 聖書を解き明す じつと聞いておられたイエス様は、「ああ、知識がなく、道理がわからない人たち。預言者たちが語ったことすべてに、神様のご計画が表されているのに、わかっていない鈍い人たち。キリストが苦しみを受けることは、神様が定められたご計画で、メシアが苦難を通して栄光に入ることも、ご計画の必然だったのです。」そして、モーセ(五書)とすべての預言者から始めて、全聖書の中に自分について書いてあることを詳しく説き明かされました。荒野で毒蛇に噛まれた人を救うためモーセは青銅の蛇を掲げたでしょう。それは十字架の象徴でした。モーセが岩を打つと水が流れ出たのは、打たれたキリストの内から流れ出る永遠のいのちを示していました。ダビデは詩編で、メシアの苦難と復活を予告しました……などなど(ルカ24:27,44)。

「ああそうだった、そうだったのか。聞いている内に、暗く冷えきっていた彼らの心が燃えていくのを覚えました。夕方になり、目的の村に近づいていました。その旅人はなおも先に進んでいこうとする様子です。2人は強いて引き止め、言いました。「私たちと一緒に泊まりください。もう夕刻で、日もすでに傾きましたから。」どうぞ一緒に留まって、もっと教えてください、メシアのことを。そこでイエス様は彼らとともに泊まるため、中に入られました。「泊まる」とは「留まる」、親しい交わりの内に留まることです。さあ、私たちも求めましょう。主よ、私と共に留まってください。主は言われます、「わたしの内に留まりなさい、わたしもあなた方の内に留まります。」(ヨハネ15:4)「神は愛なり」

3. パンを裂く イエス様は2人と一緒に夕食の席につかれました。パンをとりあげ、神様をほめたたえて、そのパンを裂かれました。その手つき、しかもその両手には深い傷跡！ はっとして見つめていると、2人にパンを渡されました。「取って食べなさい。」(マタイ26:26)裂かれたパンを食べた瞬間、彼らの目が開かれました。「イエス様だ！」「主よ、あなたでしたか！」

彼らは、暗くなっていく道を、すぐにエルサレムに向かって帰って行きました。神の都へ、主が復活された所へ。そこには弟子たちが集まっていて、「本当に主はよみがえられた」と話していました。私たちも復活の主のみもとに共に帰りましょう。そこで共に生き、共に歩みましょう。それが教会です。道は暗くなっていますが、心には光が輝いて、真理の道、いのちの道を示しています。主は言われます、「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」(ヨハネ8:12)

今日も主は、いのちのパンを与え、霊の目を開いてくださいます。御名こそ神の実体、永遠のいのち。わたしこそそれを与える真の神。取って食べよ、いのちを受けよ。「わたしが生きるので、あなたがたも生きる。」(ヨハネ14:19)